

キャンパス・コラム

夏休みが終って、キャンパスには就職活動に一応の見通しがたった4年生が戻ってきた。授業には、前期は就職活動のためほとんど出席できなかったが試験はどうなるのかと、単位取得を心配して質問にくる学生がいるし、ゼミにも、これまで顔を見せなかった4年生が就職内定をもらったことや、司法試験受験のため就職しないで留年するつもりだが、どこに足場を置いて勉強したらよいのかといった相談に来る。就職協定が廃止されて以来、就職活動の時期が年々早くなったため、4年生になっても大学には近寄れず、大学は実質3年制の様相を呈している実態をつぶさに体験していることになる。

これが由々しい弊害であることに間違いはないのだが、反面で、3年生を交えた後期最初のゼミの時間に、4年生が就職活動で体験したこと、感じたこと、後輩へのアドバイスといった内容の一種の報告会をやってみて驚いたのは、

むしろ4年生の急速な成長というか変身ぶりであった。よく考えてみると当たり前のことなのだが、就職活動は彼らにとって、おそらく、卒業後の生き方を考え、自己の性格や適性を見つめ直し、必ずしも好意的ではない他人の目や、ときには意地悪な質問に耐えながら、個性をアピールし意見を述べる。言ってみれば、自分を奮い立たせて必死に立ち向かった初めての機会であったに相違ない。

3年生のゼミのときには指名でもされないかぎり発言しなかった学生が、就職面接の方法として行われる集団ディスカッションでは、その場で出されるテーマについて積極的に発言したり、そうでなければ内定はもらえなかったと思いますなどと言うのを聞くと、ゼミでこれに匹敵するような刺激を与え、鍛え方をしてくださるかと内省し、就職活動への支援は就職部の役割と片付けてしまうのでなく、われわれにも再考の余地があるのではないかと感じてしまうのである。

広報委員 角田 邦重（法学部教授）

十一月は一年の中で最も秋らしい月だと思ふ。十月だと、まだ紅葉は始まらないし、十二月になると一気に冬到来というイメージがあるからだ。一年には四つしか季節がないのに、秋はとて短く感じる▼涼しくて過ごしやすい秋は、何をすることも良い季節だ。そのせいか、「秋」には枕詞のようなものがいくつもある▼中大にはたくさん運動部がある。どの部も、秋のシーズンを懸命に戦っている。そんな中大には、「スポーツの秋」がぴったりだ。また、キャンパス内でも、中大ステージでは演劇部の公演が催されているし、図書館一階には書道や写真の展示がある。こちらは「芸術の秋」だ▼スポーツにも芸術にも縁のない私には何かないだろうか、と考えたら「読書の秋」があった。しかし、よくよく考えると、最近の授業のテキストくらいしか本を読んでいない。今のうちに自分だけの一冊を探してみよう。読まされる本ではなくて、何回でも読みたくなるような一冊である▼そういえば、「食欲の秋」というのもあった。これだけはすでにクリアしている。もっとも、これは秋に限ったことではないが。

（玉井 安子）

編集後記

Hakomon
ちゅうおう

’99・11月号（第152号）

1999年（平成11年）11月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉 広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12

電話 03-3631-8141